実践報告

外国に繋がる青少年の日本語・教科学習支援
― 高校進学後の支援 ―

持 丸 邦 子

要　旨

本報告は埼玉県内で筆者が代表を務めている任意団体が取り組んできた外国に繋がる青少年の日本語・教科学習支援の実践報告である。前身の団体を含めて，10年以上に渡る教育実践について，今後，特に重要となる高校生の学習支援のあり方を考える上で鍵となる課題に焦点を充てる。

キーワード：外国に繋がる，日本語力，高校入試，中退，支援

１．はじめに

筆者が代表をつとめる日本語学習支援団体は，埼玉県内のＴ市において，同様に筆者が仲間と1993年に創設した大人対象の日本語学習支援団体の中の「子どもの日本語教室」から，2012年に，幼児～20才くらいまでの青少年に限定した別組織として分離して，現在に至る。

政府が，これまでの方針を実質的に移民受入へと転換する中，外国に繋がる青少年の支援についても，次の段階に備えるべく，本稿にて，これまでの取り組みを総括したい。

本稿では，特に，高校生の支援を中心とした実践活動を報告する。学習者の個人情報保護のため，団体名は省略し，個人名はアルファベットで表す。

２．埼玉県の高校入試

外国に繋がる青少年が受ける公立高校の入試方法は各県によって異なる。埼玉県の場合は，隣の東京都と比べると，外国に繋がる青少年にとって，選択できる高校が限られてしまい，特に，全日制高校への道がたいへんに狭い。その差は，来年度（2019年度），さらに開くことが予想される。

東京都では，これまで，来日後３年以内の受験生に特別な入試措置をしていたが，それを来日後６年にまで引き延ばす。特別措置では，入試問題へのルビふり，一部科目の時間延長や辞書の使用を認めている。一方，埼玉県では受験生に対してのこのような特別措置はなく，外国人特別枠を県内の数校に設けているだけである。それらの高校への受験は，科目を数学，英語に限っており，面接で日本語力を測っているが，合格するには，それぞれの学校に在籍している日本人生徒とほぼ同等の日本語力が必要である。日本語力は不足しているが，数学や英語の力がある程度はある生徒を合格させて，高校で日本語力をつけさせて欲しいと願っている日本語支援者からは，あまり，評価されていない。つまり，この制度は日本語も出来て，数学と英語も出来るエリート受験生のための制度であり，一般的な外国に繋がる受験生のための制度とはなっていないのである。一方，通常の入試では，英語圏出身の受験生は，他の科目では全く点数が取れなくても，リスニングが多く，難しい文法用語は出題されない埼玉の英語入試で

は，日本語があまりできなくても，かなりの高得点を取ることができている。

県内の同様の支援団体では共同で，県の教育委員会にここ数年，東京都同様の制度にすることを要望しているが，実現に至っていない。

３．実践報告対象者のプロフィール

以下は，筆者が2005年～2018年にかけて支援してきた27名の高校生・元高校生Ａ～Ｙたちの簡単なプロフィールである。出身国別に中国８名，フィリピン６名，南米系５名，パキスタン２名，米国３名（兄弟を１組として），他各１名である。アルファベットの下線は，小学校，中学校での取出し支援も行った生徒を示す。また，各文中の＊付きの番号は，最後の「５．支援上の課題」での番号と呼応している。

Ａ　中国・大連　中卒後来日し，隣市の定時制高校（現在は別の高校に統合）に進学　ラーメン店でアルバイト／高校在学中にＮ２合格*1／高卒後は，情報関係の専門学校への進学希望→音信不通*2。
祖母は地元で幼稚園経営*3。

<u>Ｂ</u>　中国・大連　中３の時に来日→地元定時制高校進学→高校に届けなく転居し*2，音信不通に。　日本に来て，初めて，母親と同居（中国では母親が出稼ぎで上海へ，日本でも母親が夜勤で，朝食抜きも多かった。）

<u>Ｃ</u>　中国・ハルピン　中学の時に来日→高校進学時に<u>定時制はいや</u>*4→結局昼夜開講定時制のⅡ部へ→従兄弟と共に退学*2（実家は中華料理店経営。）

<u>Ｄ</u>　中国・青島　中学で来日，学校で取出し支援・放課後教室→短大進学・ピアノ支援*5

Ｅ　中国・ハルピン　母親と日本国内を転々として，小学校の卒業式に出ず，証書がない。日本語学校で日本語学習。放課後教室にも→昼夜開講定時制高校Ⅰ部進学・ソフトテニス部・高卒時に未就職*2・米国で，すし職人希望

Ｆ　中国・福建省　小学校で来日・両親は学力的には優秀だが，姉と共に，中卒まで両親との軋轢が続いた→特待生で私立女子高校→公立大学へ→商社勤務*3。

<u>Ｇ</u>　中国　小学校６年で来日→中学で都内に転校→企業内高校へ進学（都立進学校への進学も可能な学力がついていた。）*4→両親の中華料理店が再び，Ｔ市に戻ったため，進学ガイダンスで経験談発表。

<u>Ｈ</u>　中国　日本生まれ。小学校のときに再来日。日本語は問題なくなったが，社会は苦手。中学校卒業→高校で都内へ転居。中国語ができなくなっていた。母親と日本語で会話。

Ｉ　フィリピン　中卒で来日。芸能雑誌で日本語習得→通信制高校へ（夜の一人歩きは怖いという母親・制服はいや。）在学中，介護の勉強→中退して，介護施設→正職員に*5→退職→結婚転居→母親に。

<u>Ｊ</u>　フィリピン　Ｉの弟。中３のときに来日。地元中学を卒業後，定時制高校に進学，４年で卒業し，地元企業に就職。高校の文化祭には，自分で買った車でやってきた。

Ｋ　フィリピン　中３のときに来日。カタカナも書けなかったが，定時制高校に進学。持ち前の社交性で友人は出来ていたが，勉学には身が入らず，結局，中退し，その後は不明*2。

Ｌ　フィリピン　小学校の時には日本語教室に来ていたが，中学で部活*1を始めると来なくなり，その後は定時制高校に進学。その後，不明*2。

Ｍ　フィリピン　小学校２年くらいから教室に－中１のときに隣市に転居・転校→フィリピン→帰国後，東京都の夜間中学で中卒資格*6→市内の定時制高校進学希望の時点で再会→定時制卒後，地元企業に就職（非正規らしい）。

N　フィリピン　中３年次で来日。最初，中学へのすぐの編入を断られたのち，編入，卒業→定時制へ→母親との確執[*7]があり，帰国。日本語力はかなりついていて，高校生活も楽しんでいた。

O　ブラジル・アルゼンチン　日本生まれ→昼夜開講定時制高校Ⅰ部→短大進学・ピアノ支援[*5]・アルバイトでレッスン料支払い。

P　ブラジル・アルゼンチン　Oの兄・中２の時に場面感黙で来室→定時制→アルバイト・話せるように[*7]→経済的理由で中退→弁当工場で勤務中。

Q　ブラジル　中学で支援開始→高校見学同行→工業高校進学・野球部→中退して，通学制通信制へ[*4]→卒業後，地元工場勤務。

R　ブラジル　中学で支援開始→高校見学同行→昼夜開講定時制Ⅱ部へ進学→２年生進学の際，Ⅰ部への転部を希望するも，成績不振のため転部できず，中退[*2]→不明。

S　ブラジル　日本生まれ→小学校高学年～中１の間，ブラジルへ[*6]→日本→昼夜開講定時制Ⅰ部へ→大学進学予定。

T　ペルー　高校進学ガイダンスでＳＯＳ。発達障害とされて，特別支援学校への進学を進められる[*8]も，納得せず。中学校で既に普通学級から移されたため，英語の授業もない，という訴え。受験まで数回，支援。→定時制高校進学後，家族の都合で帰国。

U　パキスタン　大学中退で来日→定時制へ→親戚の結婚式のため，母国へ帰国・休学期間が長くなり，中退[*2]→帰国・車のオークションショップに勤務予定。

V　パキスタン　中学で来日→定時制へ→在学中。日本語の難しさ[*1]にインターナショナルスクールへの転校を考えている。

W　米国・双子の妹・兄・弟　父親の死去により帰国。来日直後に母親が日本人ということで，日本語支援を受けられず。[*1]妹は定時制高校卒。兄は日米両国の通信制を受けるも続かず，弟は病気のため，定時制を中退[*2]。さまざまな困難のため，スクールソーシャルワーカーの支援を受ける。

X　イラン　中学で支援→高校見学同行→私立高校の相談会へ・流暢な会話・読み書き[*1]は克服されたか不明→予備校。家庭は裕福だが，国籍による制約の可能性もある。

Y　インドネシア　中１で来日。長い徒歩通学に驚く。母国では運転手付きの生活。→定時制高校→ホテル学校へ進学。[*3]

４．高校進学後の支援

次に高校進学およびその後の，学校側，NPO団体側，学習者側，と３側面での日本語学習支援のとらえ方を記述する。

４．１　高校での取り組み

入学後，埼玉県では，一定の数の外国人生徒が入学した場合，校長が申請して，多文化共生推進員による日本語指導が受けられる。ただし，受けた生徒によると，一人の指導員がさまざまなレベルの，漢字圏・非漢字圏が混合した学習者を指導するので，次第に指導を受ける生徒は減っていく，と言う。定時制高校の場合，他に学習支援員などの肩書きを持つ指導者が入ることで，きめ細かい指導も可能になっている，という。授業時間開始前の日本語指導を行う学校もある。

４．２　NPO団体の取り組み

県内各地の日本語学習支援団体のうち，学齢期の子どもを対象にしている団体は，2018年９月時点で，９団体ある（埼玉日本語ネットワーク調べ http://snihongo.sakura.ne.jp）。

中学生で来日した子どもたちと保護者向けに，

県内数カ所での高校進学ガイダンスで，日本の学校制度や埼玉県の高校入試について知らせている。このガイダンスには，中学校側から，また，県立高校から教員が数名参加して，情報伝達を行い，親子の入試に対する不安の解消を行っている。

このような進学ガイダンスは全国各地でも，地元のNPO団体が行っており，そうした団体同士の全国交流会も毎年行い，情報交換をし，親睦を図っている。この取組みは，2018年で17回目になった（http://www.tim.hi-ho.ne.jp）。

４．３　学習者側の支援への受止め環境

高校生になると，大人からの干渉を好まない子どもも多くなる中，高校進学後も多少でも接触を保つことが出来た子どもたちは，徐々に増えている。NPOは，保護者と子どもたちとの緩衝材，仲介役となることも多い。学校での日本語指導が教科となっていない場合，受けない生徒も多い。

５．支援上の課題

最後に，これからさらに増えるだろう外国に繋がる高校生に対しての支援の取り組みへの参考として，これまでの報告から浮かび上がってきた，主な課題を列挙する。

プロフィールに＊印で示した番号で課題を示していく。

５．１　日本語力

課題の第１は日本語である。

日本語能力試験のＮ２は高校生に難しい。漢字のネックからＮ３への受験にさえ至らない。

また，高校進学までの公的な日本語支援体制の不備が，高校でも響いている。話が流暢であると，読み書きはほとんどできなくとも，日本語力がありそうで，中学で部活に取り組み始めると，日本語学習に割く時間がなくなってしまうことが多い。日本語力の重要性を，よく理解していない学校現場もある。また，面接重視の私立高校も，子どもの本当の日本語力を見抜けていない。進学後の手厚い支援が必要になる。

５．２　音信不通・中退

中学までは地域の日本語教室に通ってきていても，高校進学後は来なくなる子は多い。特に男子に目立つ。おせっかいな支援者が介入する前に，高校を中退してしまう場合も多い。日本語支援のNPO団体と学校との連携体制ができると，多少，緩和できる。

５．３　家庭環境

子どもたちには家庭は選べない。経済的に余裕のある家庭とそうでない家庭との差ができてしまうのは，一般の日本人の場合と同様である。それでも，不利な環境を無料の支援によって，NPOが少しは補完している。

５．４　高校への固定観念

日本社会にある学校のランクづけは，かつてよりは緩くなっている。このランクづけと共に，日本の学校制度への無知が高校進学の際の保護者との話し合いで，進学先を決める際にネックとなることがある。米国や中国と比べると，日本は，学歴万能主義ではない。学歴の挽回も可能である。保護者だけでなく，支援者，中学教員の固定観念も変えていく必要がある。通学制の通信制など，経済的な負担は大きいが，新しい学校のしくみや，企業が自身のグローバル化に呼応して精鋭化した企業内の高等学校（給料を得ながら，大卒でも入社が難しい大企業に就職できる）があることを知識として知っておく必要がある。

５．５　仕事（保育士／介護士）

これまでに支援してきた子どもたちが高校在学

中に仕事に接近していく。

今年になって，短大の保育科に進学した元高校生にピアノレッスンの支援をするという経験をした。日本の子どもに比べて，ピアノを習っている外国に繋がる子どもは少ない。高校で進学先を選択する際に，保育士にピアノレッスンが必要ということに気づかなかった。幸いにも音楽の教員や，子どもの頃はピアノを習っていたという会員がいたために，ピアノ教室を見つけるまで，対応できた。教室に通う費用も自らのアルバイトで負担するところが，一般的な日本の子どもとは事情が異なる。

高校（通信制）在学中に介護ヘルパーの学校にも通って，結局，高校を中退して，介護施設の正職員にまでなった子がいる。介護施設での若い職員の仕事環境は厳しく，辞職してしまったが，これは，外国に繋がる子特有ではない。

５．６　母国と行ったり来たり

子どもにとって，言語習得にこれほど困ることはない。家庭の事情でやむを得ないことはあるが，このような行き来が日本語習得に悪影響を及ぼすことは保護者も支援者も知っておく必要がある。

高校受験で中学卒業の資格がない場合は，夜間中学に行くか，中卒程度認定試験を受ける。

５．７　心の問題

子どもたちは日本語が不自由であることなど，心に大きなストレスを抱えている。

母親との確執は外国に繋がる子でなくても，同性である女の子に起き得る問題である。進路選択の際，また，いつでも起きる可能性があり，外国に繋がる子どもの場合は，国に帰るという選択肢を取ってしまう子もいる。また，保護者との意志疎通が母語に限られる場合，子どもの母語喪失は親子関係の上で重大な問題となる。

場面感黙の子に対しては，教員経験会員のかつての教え子がそうだった，会員自身がそうだった，その子に寄り添う中学の担任がいた，高校進学先でのきめ細かい対応もあった，そして，アルバイトをすることで劇的な変化が起きた。経済的な理由で中退せざるを得なくなったが，頼もしい兄に成長したようである。

５．８　発達障害・学習障害との見分け

最近も新聞で大きく取り上げられたが，外国に繋がる子どもは，発達障害や学習障害と間違われる場合がある（朝日新聞，2018年６月24日）。支援NPOは，長年，子どもたちを見てきた経験から，たいていの場合，時間が経つと，発達障害的な行動は収まることを知っている。筆者が関わった子どもたち，特に男の子は言葉で表せないために，来日当初は行動に落ち着きがない，乱暴，などの現象が出てくるが，日本語が上達するに連れて，数ヶ月で落ち着く。

高校進学ガイダンスに助けを求めてきた親子の場合，子どもの学力や思考力には問題がなく，定時制高校に進学した。この男子の場合，女性的な話し方だったことが一番の誤解の元だったかもしれない。日本語支援者の影響を強く受けたためと思われる。

子どもの日本語教育研究会では，すでにこの問題をテーマとした研究会を2017年３月の全国大会で行っている。当該支援NPOでも2017年９月に研修会を持った。

文部科学省の調査によると，2016年時点で全国の公立小中高には，日本語指導が必要な子どもたちが約4.4万人在籍し（https://www.e-stat.go.jp），さらに増えていく。これまでの実践から，学校現場，行政，NPO，地域との協働で，外国に繋がる青少年に心地よい居場所を創り出すしくみを創っていきたい。